C—8　幼児期の相互交渉の形成について——保育園3才児の場合——

愛知女子短大　岡野雅子

目的　前回にひきつづき、その後の年令において幼児期の友だち関係の形成のすじみちとそのダイナミズムの変化について明らかにする。今回は、3才になって、初めての子ども集団への日常的参加をした段階における相互交渉の形成について探る。

方法　対象児は4月に初めて保育園へ入園した子どもで保育園生活へ一応の適応を示したと判断され、友だち関係の形成されはじめる段階にあると思われる公立保育園a.b.c.に各々通園しているM児(女3才7ヶ月)、Y児(男3才3ヶ月)、A児(男3才4ヶ月)である。入園後2ヶ月を経過した時点から1ヶ月半にわたり各々の対象児の該当保育園において自由に遊んでいる場面での他者との関係について週1回30分間観察記録した。

結果　M.Y.Aの3事例を合わせた全体では、観察1回あたりの接触(コンタクト)数は本児-他児間、本児-保母間ともに増加を示している。本児-他児間では本児→他児が減少し、他児→本児が増加する。相互作用(インタラクション)の長さの平均は、本児-他児間、本児-保母間ともに減少するが、本児-他児間では他児→本児の方が本児→他児よりもより長い相互交渉をひきおこすようである。

接触づけの内容では、出現頻度は言語によるもの、行動によるもの、模倣によるもの、マイナス接触によるものの順に高く(多い方から)、本児→他児では模倣、行動によるものが増加し言語によるものが減少し、他児→本児では言語によるものが増加する。接触づけの内容と相互作用の長さの関係では、模倣、行動、マイナス接触、言語の順で相互交渉が長くなる傾向がある。また男児への接触づけは模倣、行動で、女児へは言語で行ない、女児への接触の方が相互交渉が長くなる傾向が認められた。